経験から生まれる地域の活力

～お年寄りが地域活性化の糸口に!?～

熊本高等専門学校/ちーむめいわ/田代結菜/今村彩乃/オチ

地域課題の選択　①「令和2年7月豪雨の被災地における地域の持続に必要な取組みについて」

1. はじめに

芦北町は少子高齢化が進行するとともに令和 2 年 7 月豪雨災害も重なり、主に若年層の人口流出が止まらない状況である。そこで、芦北町に新たな観光地を設立し町を盛り上げることを目標に、お年寄りがメインとなった地域活性化のアイデアを提案する。

2. 現状分析/調査内容

広報あしきた[1]の人口統計によると、2013 年から現在までの 10 年間で 3850 名の減少が確認できる。また、豪雨災害後の 5 か月で 221 名の人口減少、世帯数で見ると 64 世帯の人口流出が確認できる。この世帯数は、2022 年から 2023 年の一年間の総世帯数の減少が 80 世帯であることを考えるとかなりの世帯が町外に転居したことがわかる。

(1)芦北町生き生き大学への独自のアンケート調査より

芦北町には生き生き大学と呼ばれる 60 歳以上のお年寄りが園芸や舞踊が行えるクラブ活動が月に一度行われている。今回は三味線講座の参加者にアンケートを取った。豪雨災害後に芦北町の過疎化を感じるかという質問に対しては約 94%が「はい」と回答した。また、図 1 のアンケート結果からわかるように地域活性化に協力したいかという質問に「協力したい」と回答した人は約 67%であった。協力したくないと答えた人は「高齢者だという負い目があるから」、「健康や年齢の不安がある」という声が大多数を占めた。

(2)芦北町在住者への独自のアンケート調査より

また、10 代～80 代の幅広い年代にアンケートを取った。豪雨災害後に芦北町の過疎化を感じるかという質問に対しては全員が「はい」と回答した。そして、図 2 のアンケート結果からわかるように今からでも地域活性化に協力したいかという問いに対しては約 47%が協力したいと答えた。協力したくないと回答した人の主な理由は仕事が忙しいと理由が大半を占めていた。また、図 3 の老後に地域活性化に協力したいかという質問に対しては 6 割以上の人が協力したいと答えた。協力したくないと答えた人は若年層が多く、理由としては町外に就職するから、町外に引っ越すからという理由が多かった。

(3)水俣市ローズフェスタ担当者への聞き込み調査より

先行事例として、近隣の水俣市で春と秋に開催されているローズフェスタについて担当者に聞き取り調査を行った。ローズフェスタが開催されるエコパークはただの花壇だったが、人を呼ぶにはどうしたらよいか、と考え平成 21 年に薔薇に特化させたローズガーデンとしてローズフェスタが始まった。高速道路が開通した平成 31 年から爆発的に観光客が増え始め、特に鹿児島県からの観光客が多いそうだ。ローズフェスタが開催されている春には、併設された売店の売り上げが他の月の 2 倍以上になるとも聞かされた。

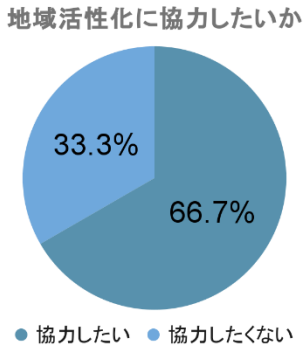

図1）生き生き大学参加者へのアンケート結果

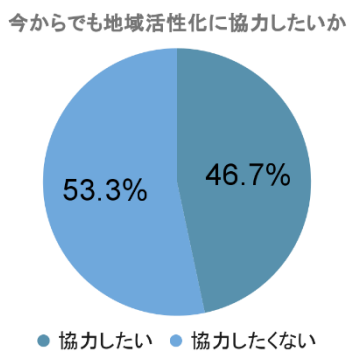

図 2) 芦北町在住者へのアンケート実施結果①

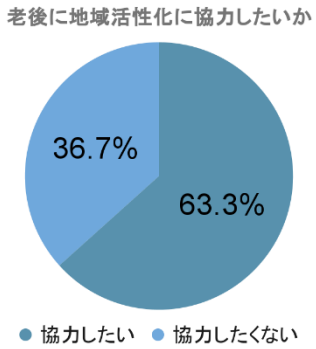

図 3) 芦北町在住者へのアンケート実施結果②

3. 課題に対する解決策と具体的な政策アイデア

(1)フラワー園についての概要

芦北町在住者と生き生き大学参加者へ「町外から来た人にどこを勧めるか」と質問した際にそれぞれ約 7 割の回答者が選んだ海浜公園に花を植えることを提案する。同じくアンケートより、地域活性化に協力したいと答えた人に、「もしフラワー園が完成すればどのようなことを手伝いたいか」と質問したところ、花を植える、花の説明を行う、調理師免許を持っているため特産品を売るなどの声が上がった。このように花を植えたり地域の特産品を売ることにはシルバー人材を活用する。

(2)フラワー園におけるお年寄りコミュニティの形成について

町民とともに花を植えたり、町内外から訪れる人と交流をするうちにお年寄りのコミュニティ形成にも役立てることができると考える。水害後、近隣住民の引っ越しや水害のショック等によって孤独を感じるお年寄りの多くは、生き生き大学等のコミュニティに属していないことが多く、その存在を知らないものもいる。実際に、生き生き大学参加者からは、生き生き大学のように同年代との集まりに参加する前と比べて今は孤独感を感じにくく毎日が楽しいとの意見もあった。

また、現在町内を走っているバスをフラワー園のボランティアは無料で利用できるとなれば、現地までの足がないというお年寄りも気軽に参加できる。他にも、花を植えたりなどの活動を通して、過疎化が進む地域に住むため人と交流できなかった人など新たな交流の場が生まれることが想定される。

(3)フラワー園の運用と今後について

運用は生き生き大学のように芦北町主催でボランティアとして募集する。お年寄りでも簡単に作れる新たな芦北町の特産品を使ったメニューの販売や花を売ったりする。このときに、植える花についての指示やボランティアの管理等はコミュニティセンター課の指導の下で行う。生き生き大学はコミュニティセンター課が、活動内容や活動日、参加者の管理などを行っている。このフラワー園に関するコミュニティは、生き生き大学ボランティア部のように新たな生き生き大学の組織として考えているため、資金面や人材の管理はコミュニティセンター課が管理する。

この施設が完成すれば、芦北町について気軽に知ることができ、町民とも交流できる憩いの場として観光地化も期待できる。近隣の青少年の家と協力し、青少年の家に宿泊すれば夜のフラワー園で星空観察ができるプランなどを新設するのもよい。観光地化することによって芦北町の存在をほかの地域に知らせることができ、若年層の呼び込みにもつながるかもしれない。また、ゆくゆくは水俣芦北ローズフェスタとして町だけではなく、葦北郡全体としての地域活性化を目指す。

4. まとめ・今後の展望など

今回、お年寄りや隣の水俣市など独自にアンケートや聞き込みを行うことで詳しく聞き込みを行うことができ、提案についても深めることができた。芦北町在住者より「海浜公園に花を植えればいいと私も考えていたからこの提案には賛成だ」と賛同も得られてうれしかった。

参考文献

[1]広報あしきた(家に毎月届くものを参照)